

ことばの壁



金属労協 (JCM) 事務局長
浅沼弘一

インダストリアル・グローバルユニオンは世界140カ国、5000万人を組織する産業別の国際労働団体である。組織の意思決定を行う年2回の執行委員会をはじめ、年中様々な会議が行われている。参加者は世界中の国々から集まるので、話す言語も多様で、直接会話することはできない。バベルの塔を恨む。そのため、通訳の仕事が極めて重要となる。昨年秋に行われた世界大会では、英語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、日本語、ロシア語、ポルトガル語、スウェーデン語、アラビア語の9か国語に対して同時通訳が提供された。舞台裏では、発言がすべてまず英語に通訳され、英語から各国語に通訳されるというリレーが行われている。日本語の同時通訳者が8か国語を操って通訳するというわけではなく、よく考えられている仕組みである。ただ、これで不便なのは、時間がかかることである。発言者の表情や身振りなどが遅れてからでないと理解できないというもどかしさに加えて、時にはタイミングが遅れることで賛成に手をあげたつもりが反対にあげてしまうというようなこともある（かつて不覚にも賛成すべき議題に日本参加者全員が反対してしまったことがある）。

英語を自由に操れないということは、世界に流れる情報から遅れてしまうということであり、日々もどかしい限りである。メールでコメントを求められても、翻訳に時間がかかり、コメントを送ろうとしたときは、すでに議論は終わっ

てしまっているというようなこともままある。

改めて日本語は、他のヨーロッパ系の言語と比べると、極めて特殊な言語であることを痛感する。同時通訳者もヨーロッパ系の言語は2名体制だが、日英通訳だけが3人でよってたかって同時通訳している。確かに、語順も違うし、共通の単語なんてほばない。文字にしても、日本語で使う文字は半端なく多い。義務教育終了までに覚えなれないといけぬ漢字の数は2000文字に及ぶ（同じ漢字を常用する中国はこれ以上で3000文字だそうだが）。さらに、これにひらがなとカタカナが加わり、送り仮名という何とも難しいルールで表現する。それに比べれば、英語は簡単である。文字もアルファベット20数文字しかないし、他のヨーロッパ系言語にある名詞の性などのややこしいルールもない。この簡単さが、世界で広く使われる理由のひとつであろう。22の公用言語のあるインドでは、共通な言語として英語を使っているし、北欧やドイツの人たちは、母国語以外に、当然のごとく英語を使うことができる。

日本では、すでに英語を小学校から勉強するようになってきているらしい。グローバルの共通語なのだから、早いうちに学ぶというのがよいということからだろう。しかし、学ぶのに相当長い時間をかけないといけぬ日本語があるのに、はたして英語にまで手が回るのか？ 母国語が日本語で英語も使える、ということ、母国語が英語で日本語も使えるということ、どっちがいいのか？ 難解な日本語を母国語として自由にあやつりながら、英語でもコミュニケーションできるという世界的に見ても稀有な人材を育てられるということ、極めて大切なことではないのかと思うのである。

ことばは文化そのものである。国や地域によって違っているのは、ある意味しかたがない。それぞれの国が異なる言葉話し、文化を持って生活している。それぞれの価値観を尊重することは当たり前ともいえる。自らの文化を押し付けるべきではない。しかし、人や物、情報が容易に地球規模で行き来する今の世界では、それぞれの文化の違いを理解しながらも、最低限守るべきルールが必要である。これは先進国が発展途上国に自分たちの考えを一方向的に押し付けるということではなく、人として尊厳を持って生きるためのルールは守るべきであるということである。この考えを、働くという観点から見たときに守るべき最低限のルールが、ILOの中核的労働基準であると言えよう。また、企業が売り上げを増やし利益をあげるという行動と働く人の尊厳は両立しがたいと考える経営者も多かろうと思うが、これを両立するために努力をしようというのが、SDGsのゴール8である。

これらのことは、言語や文化の違いを越えて、地球上で活動をする企業や働く人が守らないといけぬルールである。今回の特集は、企業の社会的責任がテーマである。ぜひとも、日本という枠から視点を解放して、全球的な観点で今一度考えてみてほしい。



ブリュッゲル作『バベルの塔』